
お姉さんになる日

Yoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姉さんになる日

【Zマーク】

Z5596F

【作者名】

Y.O.i

【あらすじ】

小学校教諭を務める「私」。担任するクラスの少女が、放課後の
彼に話しかける。「先生、お母さんが、妊娠したの」お姉さんにな
れると喜ぶ少女だったが、教師はやがて、ある不可解な事実に気が
つく。

「ねえ、先生。」

放課後、教室に残つて先日の課題の添削をしていた私のもとへ、クラスの女子児童の一人がやつてきた。

「なんだい？」

私は答案から目を外し、少女の顔を見ていった。少女は丸い目を更に円くして言つた。

「お母さんが妊娠したの。」

私はどきりとした。少女の口から妊娠といつ言葉が飛び出すとは予測していなかつた。

「ほんとかい。」努めて冷静に私は言つた。「じゃあ、お姉さんになるんだね。」

「お姉さん？ 私が？」少女の元い瞳が喜々と輝いた。

「私、お姉さんって呼ばれるの？」

「そうだよ。」私は微笑んで答えた。

「もつと、お姉さんらしくしないと、赤ちゃんに笑われるだ。」

「お姉さん、お姉さん。」少女はうれしそうに何度も繰り返した。

「お姉さんなんだ、ちいさい私が。」

「小さくても、お姉さんはお姉さんわ。」私は笑つた。

「そうだよね。」少女は言つた。

「赤ちゃんは私よりきっと小さこもの。」

少女はその場で意味もなくぐるぐると回つた。うれしさが彼女をそうさせようやうだった。

「先生は、赤ちゃん見たことある？」

「そりやあるよ。」

「小さいよねえ。」少女は両の手を、赤ちやんくらこの大きさに開いた。

「おでてなんかも、こんなに小さい」
彼女の指をすぼめるようにして表した。

「私見たことあるんだ、ケン君が家に来た時。」

「ケン君？」

「ケン君。お母さんのお兄ちゃんの子供。」

「それはこいつと言つんだよ。」

「そう、こと」。少女は真面田な顔で言つた。
「ケン君とつても小さいの。」

そう言つとまた両手でケン君の大きさを表した。

「もうすぐケン君みたいな赤ちゃんが生まれるんだもんね。」

先生、名前はどうしよう。」

「それは、お父さんお母さんが考えてくれるさ。」私は笑つた。
「君が心配しなくて、良いことだよ。」

少女は真つ直ぐに私を見ていつた。「でも、家、お父ちゃんこないよ。」

不思議そつに首をかしげた。

「じゃあ、お母さんが考えるのかな。」

私ははつとした。

少女の家庭は母子家庭だった。父親は存在しなかつたのだ。
私は言葉を失つた。

「先生、先生。」少女は不思議そつな顔で私を見ている。

「どうしたの先生。」

「ああ・・・なんでもないよ。」私は努めて微笑んだ。「お母さん、うれしそうだった?」

少女は頷いた。

「うん。笑つてた。・・・でも。」

「でも?」私は聞き返した。

「でも、お母さん私に聞いたんだ。妹か、弟ほしくない?って。」「なんて答えたの?」

「もちろんほしいうつて。」少女は自身の胸の内を表すよいつい、体をきゅっと縮めた。

「いもうとがいいなつて。男の子つて、すぐに散らかすでしょ。私が飯作つて上げるんだ、サヤちゃん!」

「サヤちゃん?それつて、妹の名前?」

「やべ。お名前。」少女はにかりと歯を見せて笑つた。「私のサヤちゃん。」

「なんだ、もう勝手に決めてるんじゃない?」私も笑つた。
えへへ。少女は少し恥ずかしそうに身をくねらせた。

「おかあさん、結婚するの?」

私は努めて柔和な表情で彼女に問い合わせた。

少女はきゅとんとしていた。

「何で?」

「なり、いいんだ。」私は苦笑いした。「なんでもないんだよ。」

「変な先生。」少女は首をかしげた。

「先生、お母さんと結婚したいんでしょ。」

「ち、違つよ！」私は今考へると不自然なほど慌てて否定した。

「だつて、じやあ何でお母さんが結婚するかどうかなんて聞くの？」少女が意地悪そうに笑つた。

「好きなんだ。//ちちゃんが、たづくんと結婚する時も、そりだつたもん。」

私は苦笑した。

「先生は、お母さんが、もっと幸せになつたらいいなと、思つただけだよ。」

私はそう弁解した。

「ふーん。」少女は不思議そうに言つた。

「お父さんいなくとも、幸せだけばな。わたし。」

そう言つて首をかしげていた。

少女はしばらく話した後、生まれたら私にサヤちゃんを見せてくれる約束をして、手を振つて帰つて行つた。

私は少女が帰つてからも、なかなか仕事に手が着かなかつた。

そうしていろんうちに、上級生の担任をしていろん上の彼女が来たので、その話をすると、彼女は笑つていた。

「保護者の家庭の事情を詐索しなくても良いじゃない。」

「でも、担任としては、子供の家庭の様子くらい把握しないと……。」

「言わなくても、向こうからやつてくれるわ。」彼女はあきれていた。「知らせる必要のあることない。」

返す言葉がなかつたので、私はそのまま黙つていた。
彼女も私の脇に突つ立つて、しばらく黙つていたが、やがて、

「サヤちやんって、名前もいいかもね。」 そう言つて、教室を出て行つた。

私はすっかり忘れられていた、答案の丸付けを再開しようと赤ペンを持ったが、

彼女の置いていった言葉の真意にそこまでようやく気がついて、廊下の向こうに小さくみえる後ろ姿を、慌てて追いかけた。

(後書き)

先生だって一人の人間。

それに気がつくのは、自分が当時の先生と、同じ位の年になつてからなのではないでしょうか。

子供の無邪気な言動に、表情に出さないまでも、はらはらしていたんだろうなあ。そう思つて書いた文章です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5596f/>

お姉さんになる日

2011年1月8日02時43分発行